

生物多様性の保全と持続可能な社会のために

札幌市円山動物園 オオワシ 国際シンポジウム in SAPPORO

(主催)札幌市円山動物園(共催)オオワシ国際シンポジウム実行委員会(猛禽類医学研究所、酪農学園大学、(株)ほくせん、北海道コカ・コーラボトリング(株)、ハーランドフレイバー(株)、(株)JT北海道、北海道新聞社)
(後援)環境省北海道地方環境事務所、国土交通省北海道開発局、北海道、(社)日本動物園水族館協会

「生物多様性の保全と持続可能な社会のために」をテーマに、6月23日(月)、札幌コンベンションセンター特別会議室(白石区東札幌6条1丁目)において「オオワシ国際シンポジウムinSAPPORO」が開催されました。札幌市円山動物園園長の金澤信治氏をはじめ国内外から有識者が参加。絶滅の危機に瀕しているオオワシの生息状況や、今後、取り組むべきことなどについて活発な意見が交わされました。



去る6月23日、札幌コンベンションセンターにて開催

オオワシの絶滅は、生態系の破壊をもたらす重要な問題

主催者である上田文雄札幌市長のあいさつ、猛禽類医学研究所代表で獣医師の齋藤慶輔氏によるコンセプト説明、有識者3名によるキョウトスビエチを経て、齋藤氏をファシリテーターにパネルディスカッションがスタート。



90分にも及んだパネルディスカッション。野生生物保護の重要性について意見が交わされた

まず最初に環境省北海道地方環境事務所統括自然保護企画官の坂本真一氏が「日本国内におけるオオワシやオジロワシなどの保護、現状について語り、保護するための法律の成り立ちや、1980年から継続している生息地域の変化などを説明。生息環境の維持・改善に向けての取り組みを、ハザードマップの作成や野生生物保護センターの活用など、オジロワシでのプレゼンテーションを交えながら事例を挙げて細かに解説しました。



ファシリテーターを務めた齋藤氏は、自身の体験談なども交えてディスカッションを進行

続いて、元札幌市円山動物園園長の北村建一氏が「飼育下における希少種の繁殖技術や繁殖への取り組みの歴史、目的を自身の経験を交えながら説明。今後はさらに野性復帰の手助けの一端を担うことになると、動物園への期待を語りました。

やがて人間とオオワシが、自然をめぐって争うようになっていくという、モスクワ大学教授でオオワシ研究の第一人者であるウラジミール・サエフ氏は、近年、活発になっていくオホーツク海沿岸の開発・利用を例に挙げ、オ

オオワシの生息地域のほとんどが、天然資源や石油ガスの開発地域に一致していることを危惧。

そうした海における人間の活動が、海岸付近のオオワシの生息地を侵害してしまおうとするが、自然をめぐって争うことになるだろうと述べ

ると同時に、オオワシは生態系全体の健全性を測る重要なインジケータ(指標)であるとの視点から、自然環境や生態系が、どういう状況なのかを、どういう状況なのかを知るために、オオワシの生息地域を保護し見守っていく必要がある。また、円山動物園が行っている活動や研究は大変重要なものだと語り、今後も技術や経験を生かした成果に期待しているとも述べ、より一層のロシアと日本の協力体制の必要性を説きました。



市民と動物園が一体となって自然環境について考えていくため、と語る金澤氏

その後、そうした問題を乗り越えた成功例として、英国オジロワシプロジェクトチームメンバーのロイド・デニス氏がスコットランドにおけるオジロワシの野性復帰プロジェクトについて、キョウトスビエチでは語りきれなかった話を紹介。

政治家や環境保護者たちをひとつにまとめ協力体制を築くこと、幼鳥を多く集めることを苦勞とした点として挙げたほか、円山動物園が取り組んでいるプロジェクトについて、展示が主となる動物園においては、幼鳥を人間から隔離する施設の整備や、同じ目的を持つて活動している他チームとのあらゆる情報の共有などが、今後の進展には必要不可欠であるとの助言。さまざまな困難を乗り越えるためにも、国境を越えた協力体制の重要性を呼び掛けていました。

デニス氏の話を聞き、札幌市円山動物園園長の金澤信治氏が「円山動物園として希少野生生物の保護活動について、改めて詳

しく説明した。これまでのレクリエーション型の動物園から環境教育や種の保存を発信できる動物園(ヘリット)オオワシプログラムや周辺環境などを例に挙げ参加者に伝えました。



「オオワシ・プログラム」は、オオワシと人が共有するために重要と語るオオワシ研究者のマスターロフ氏

今後動物園が持つ高い飼育・繁殖技術を活用して、札幌の環境教育の拠点、北海道の生物多様性確保の基地として動物園を生かし、北方圏の動物の保護や環境保全の情報を発信し続けることで、道民や市民の皆さんと共に自然環境の大切さを外に向けてアピールしていきたいと語りました。

オオワシの将来、共存を実現させたい
越冬地である日本と繁殖地であるロシアの協力を、札幌の環境教育の拠点、北海道の生物多様性確保の基地として動物園を生かし、北方圏の動物の保護や環境保全の情報を発信し続けることで、道民や市民の皆さんと共に自然環境の大切さを外に向けてアピールしていきたいと語りました。

さらにマスターロフ氏が、自然の中でオオワシなどが十分に生息しているというより、そうした環境を守るために、今や、やがて活動に着手しなくてはならないとアピール。「オオワシ・プログラム」のような活動や、共同研究、情報交換を通じて速めていくことや世論形成の重要性を語り、結果としてオオワシと人間の共存が確保できる道が拓かれると述べました。



「オオワシ・プログラム」の重要性を語り、結果としてオオワシと人間の共存が確保できる道が拓かれると述べました。

同時に、このような取り組みをロシアにも広げてほしいと会場に集まった参加者へ協力呼び掛けました。おおよそ90分に渡り行われたパネルディスカッションの締めくくりに、「野生生物保護の重要性」に對し今後、どのように取り組んでいくべきかという

野性復帰の手助けの一端として、これからの動物園の保護活動に期待する北村氏

同時に、このような取り組みをロシアにも広げてほしいと会場に集まった参加者へ協力呼び掛けました。おおよそ90分に渡り行われたパネルディスカッションの締めくくりに、「野生生物保護の重要性」に對し今後、どのように取り組んでいくべきかという



約200名の参加者が会場を埋めた当日の様相

北海道の野生動物「復元プロジェクト」の環として、円山動物園が取り組んでいる「オオワシ・プログラム」。

円山動物園では、円山原林、円山川、円山公園などの周辺環境も含めたエリア全体の環境保護・生物多様性の確保を行い、市内全域・北海道全体の自然環境についてのメッセージを世界的に発信することを目的に、北海道の野生動物復元プロジェクトに挑戦している。その一環である「オオワシ・プログラム」は、北海道に生息し近い将来絶滅の恐れがある希少動物のオオワシやシマフクロウを、一定数が生存している場所ではかの研究・活動機関と連携しながら円山動物園の高い技術で繁殖させる。餌の補給方や飛行訓練を行い、自活能力を引き出して自然界に放鳥。野性復帰させる手法の確立を目指しています。

オオワシの体長はオスが約88センチ、メスが約103センチで、翼を広げると1.4メートルを超える大型のワシで、ユーラシア大陸北部、オホーツク海沿岸部やカムチャッカ半島周辺に分布。主に海岸や河口部、湖沼周辺のがけや森林に生息し、サケやマスなどの大型魚を捕食しますが、時に海鳥やアザラシなどを襲うこともあります。

現在、オオワシの総個体数は約5,000羽(国際自然保護連合発表)とされ、絶滅の危機に瀕しています。越冬地である日本では、2005年12月に保護増殖事業計画が定

められ生息状況などの把握や生息環境の維持および改善を行うなどの取り組みが始まりました。しかし飼育下での繁殖は困難で初めての成功例は日本円山動物園など道内4施設にとどまっています。

生物多様性を考える「必要性」を「種の保存」動物園の発信

近年、地球環境保全への関心が急速に高まる中、共通のキーワードとして広く用いられている言葉である「生物多様性」。この言葉の基本的概念は動物、植物、微生物などあらゆる生物種と、それによって成り立っている生態系、さらには生物が過去から未来へ伝える遺伝子の多様性を指します。大規模な生態系の破壊は必然的にそれらを構成する種の多様性や個体の多様性の喪失を招くことになり、その結果生態系の多様性にも影響を及ぼす構造となっており、最終的には人類の将来にも影響するだろうと考えられています。生物の多様性の危機は人類生存の危機にまでつながっていることを強く認識し、人類も地球環境の変化に無関係ではないことをしっかりと認識せねばなりません。

このことから「種の保存機能」を持ち、市民に身近な場所や環境を考慮する機会を提供することで、できる動物園が生物多様性の保全に率先して取り組む使命があるのではないのでしょうか。